

比較文學研究

巻頭言：文明へ……………竹内 信夫（1）
ルネサンスと日本人……………平川 祐弘（4）

実存の幾何学——ミラン・クンデラと音楽……………黒田 愛（14）
壯年期の内村鑑三に於ける諸問題
——日本の近代の曲がり角で……………坂本 兵部（33）
小説と洋琴——内田魯庵における文学の風刺……………森田 直子（55）
漱石文学と植民地——大陸へ行く冒険者像……………西原 大輔（70）
大正文学の陰影——張資平の恋愛小説と田山花袋……………張 競（87）

『徒然草』における文末の反復とヴァリエーション……………渡辺 邦男（108）

【書評】

*A Fantastic Journey: The Life and Literature of Lafcadio
Hearn* (P. Murray)……………ジョージ・ヒューズ (田村義也訳) (115)

『世紀末と漱石』（尹相仁）……………稲賀 繁美（129）
『漱石と魯迅の比較文学研究』（林叢）……………西原 大輔（137）
『異文化を生きた人々』（平川祐弘編）……………鈴木 禎宏（140）
『近代日本の翻訳文化』（亀井俊介編）……………金澤 英之（145）
『世界の中のラフカディオ・ハーン』（平川祐弘編）……………小沢 自然（148）

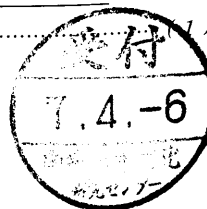
【Le Rond-Point】

森亮先生のこと……………平川 祐弘（152）
中村都史子氏「日本のイブセン現象・1906-1916」
論文審査の結果の要旨……………小堀桂一郎（154）
博士学位論文公開審査余滴……………大谷幸太郎（157）
新田義之氏「R・ヴィルヘルムと中國」論文審査の結果の要旨……………小堀桂一郎（160）
福田真人氏「近代日本における結核の文化史」論文審査の結果
の要旨……………小堀桂一郎（162）
福田真人氏博士論文審査傍聴記……………成 惠卿（165）
1994年度八王子セミナーに参加して……………稲賀 繁美（167）
神野志隆光氏講演会「神話の思想史」傍聴記……………前島 志保（173）
内野儀氏講演会「比較演劇学の試み」傍聴記……………鈴木 禎宏（175）
『壁なき大学』発足始末——あらたな欧亜学術交流にむけて……………稲賀 繁美（176）
北米で日本文学を教えたい方へ……………榊 教子（179）

外国語要約……………

66

東大比較文學會



一九九四年度八王子セミナーに参加して

稲賀繁美

標記のセミナーにはじめて講演者としてお招きいただいた。あらためて深く感謝申し上げます、併せていくつかこのセミナーの意義と問題点について感想を述べさせていただきたい。卒業生・会員とは申せもはや部外者の身分であるから、もとよりはなはだ僭越なことは重々承知している。しかし課程外の者だからこそ見える部分もあるだろう。さらに今回は聴講者から講演者へと立場が変わって、今までさして気付かなかったことが見えてきた。視点の違いを出発点にしてステレオ透視を試み、物事にいくばくか立体感を与えるのは比較文化的考察の初歩だろう。さらに一口に比較文学比較文化といっても、そこには地方大学で教鞭をとってみなければ分からない局面

も隠されている。東京大学の流儀がともにも通用しない世界を知って、そこていろいろと工夫をしてみればじめて開けてきた別の可能性もある。加えて日常的に接触をもてない遠隔地の一介の研究者にとっては、今回の指名は、今後もうめつたにない晴れ舞台でもあった。そうした場所得た悪感なりとも、忘れないうちに書き付けておきたい。もし今後に役立つ観察が見られるようであれば、ご活用いただければ望外の幸と念ずる次第である。

*

一九八八年に留学から帰国して以来これ六年間連続して参加させていた。なげ良い年齢をして懲りもせずいまだに参上するののかといえ、とにかくこれだけ刺戟に富んだ会合は日本国内はおろか外国に出てもめつたにお目にかかれなからである。一年一年と年月を重ねるごとに磨耗してゆく一方の自分の感性と知性とへ一種のカンフル注射をしていただく、これは一年に一度だけの貴重な機会であり続けた。さまざまな講演からはほかには得られない強烈な密度の学術情報と問題意識とを授けられ、また海外を含めた遠来の友人たちとは久闊を叙し、脱領域の最新情報を交換し、将来の計画や夢を語らう。

題を前以て郵送によって追加連絡してはいただけないだろうか。外部から参集する者にとつては、なんだあの話題と知っていたなら、来る前にちよつと復習しておけば、もっと有意義な情報を提供したり、少し的を得た質問を呈することもできたのに、と残念に思う場合が少なくないからである。

(2) またこの修士論文発表のあとに、まるで論文審査会での審査教授の指導みたいな講評がなされるのは、いかがなものか。そうしたことはあくまでそれまでの授業および修士論文審査のなかで、前以てしかるべく指導されていなければならぬことではないか。配布資料の出版の明記とか、発表主旨の明快な構成であるとか、論旨を切り詰め、プランを明確に呈示することで、聴衆にたいして不親切でない情報を提供する技術であるとか、時間配分であるとか。そうした形式的な要件の不備は、本来セミナーにおける発表のあとで指摘されるべき性質のものではなからうかと考える。というのもこの発表はすでに「部外者」の臨席をも前提となされる公式の発表であるからだ。本年は主任教授の退官をはじめとして、「本来」を貫くには困難な要素が介在したこと、また部外者がこうした指摘を

新進の修士論文発表者の若々しく見事な達成ぶり、そして時に圧倒的なまでの成長ぶりに脅威を覚え感嘆する。先輩諸先生からはあらたな学問的刺戟と叱咤激励を受ける。その熱気に当てられるとつい卒倒しそうにすらなるが、こちらも負けじと、あらたな留学生や新入生をお相手に、かれらの進路にながしが参考となりような話題を提供しながら夜を徹して歓談する。招かれた特別講師の話題に讚嘆し嫉妬を覚えながらも、よしこれを自分の論文に引用してひとつとつとつと活用してやろうと、画策する。あたかも季節は梅もようやくやくほころび始め、鶯がまだ下手な歌声を聞かせてくれる野猿峠の春はじめ。それはまさに岡部雄三先生が説かれた、再生の時を刻み、跳躍と涌出とを約束しつつその源泉たる關をも暗示する「春のさざなみ」に他ならない。

こうしてなにか生まれかわったような爽快な快感とともに、八王子・北野の高原に憩う八王子セミナー・ハウスを後にしないことには、翌年度が始まらない。「快感」といつても時にそれは手ひどい二日酔いの頭痛・昏迷だったりもするのだが、それはあくまでハレなつてはのケの効力でもあった。たしかにひとつの「祭典」が、そこにはあった。

することは、場合によってはなほ失礼となりかねぬこと、そしてこうした指摘は呼びかけられた講師たる筆者自身の拙い——早口に詰め込み過ぎて舌足らずなくせに差し出がまし——発表への批判へと跳ね返ることは重々承知のうえだけだ。

(3) これも事情のあることとは承知ながら、発表する学生や講師が、一身上や公私の都合とはいえ、自分の発表だけを慌ただしく済ませて、ほかの講演など聴講する暇もなく急いで退散するというのは、やはりセミナーの主旨にいくぶん反する事態ではないかと思う。無論多忙な外部講師に無理を承知でお願いをする場合もあるし、今日なお苦学生ながらの厳しい生活をみずからに課している奇特な境涯にある学生の存在は否定しない。だがそれではせっかくの機会が単なる押し付けられた無給義務遂行の場所になりかねぬ。もとより学生にセミナー参加を強制するのは筋違いだろう。けれども、自分の発表だけにかまけてそれ以外は一切関知しないという形(ないし態度)の消極的参加があまりに増えるに、セミナーとしての統一的意义がいささか怪しくもなりかねない。

(4) この点に付随して危惧を抱かざるを

*

そんな脳天気な享受者の立場が、今年は一転して話題提供者の側に転じた。舞台を客席から見るのと、舞台裏を設える苦勞との違い。こればかりは体験せねば分からぬものだ。それを表裏体験してみるのが人生の怖さでもあればおもしろさ、悲しさでもあるのだろう。そしてまた、観客は演技者となって初めて、演技のむつかしさを悟りまた演技者はその立場になって初めて演出者の苦勞をかすかながら察知し、裏方や緑の下の方々の貴重さを確認させられる。いままて自分が参加者としていかに無自覚な人間であったことか。かつて舞台設定のお手伝いもしたはずなのに、なんと無神経だったことだろう。そんな慚愧の念にもさいなまれる。この場を借りて、「日常」の業務を支える方々への感謝をここに一言記しておきたい。「助手」の成惠卿さんや「囁託」の伊能明子さん、ほんとうにありがとうございました。

さて、こうしてセミナーの意義を列挙したところで、次に問題点の指摘に移りたい。

(1) 日程上の面倒は承知のうえで取返して申し上げるが、セミナー参加確定者(それも課程外の者)だけでは、修士論文発表者の演得ないのは、主催者側の教官の多くが、校務の多忙ゆえ、全日程に参加できない、という状況にたち至っていることである。一応は正規の授業の枠の外での研修活動とはいえ、新入生を中心とするオリエンテーションとして、もたいへんに重要なはずのこの会合に、課程構成教官の多くが部分的にしか参加できない(そしてまったく参加できない教官も多い)ほどにまで、学内のさまざまな委員会などの日程が立て込んである、という教育・研究・行政環境が健全だとはとうてい思われぬ。とりわけまだ着任後何年とは経過せず、中年と申し上げるには失礼な比較文化課程出身若手教官の参加があまりにも少ない。おそらく現在の所属の別や公務の多忙・重畳など、数年前の牧歌的(?)状況とは一変してしまったためなのだろう。むしろこんな無責任な危惧を表明したりすれば、それはかえってかく申す評者自身の境涯の安逸さを証しする、反面教師の観察でしかないのだろうか。実際翻つて考えてみれば、自分の本務校はそつちのけて八王子セミナーに参加できるのも、本務校の大学院課程ではおおよそ教官相互の会合はおろか情報交換も集団的學生指導もまったく存在しない自由放任だからである。

予算の執行すらどこが掌握するのか不明のままというのだから、信じてたい無政府状況だが、しかし現行の文部省の書類をクリアして出来たり組織替えをした大学院課程のほとんどが、大なり小なり同様の問題に直面しているはずである。ペーパー上の組織図と実際の教官たちの人的交流(ないしその欠如)がまったく対応していない、という信じてたい制度的放縦(ないし教育上の無責任体制)こうした状況は、ひとつ間違えば東京大学においても繰り返される恐れがないわけではないだろうが、それをまさに戯画的に演じている自分の本務校への疑念を棚上げしながら、ひたすら東京大学の教育にあらぬ理想を転化して求めるのは、ほかでもない、同じ大学院でもその社会的役割が異なるからである。

学問の創造や再生産とは無関係であること(設置基準に謳っている大学院——つまりあくまで地域生涯教育の場であって center of excellency からは除外され、研究のための大学院ではないと規定されている施設——とは違って、東京大学をはじめとするいくつかのセンターには次代を担う研究者、教育者を養成してゆく義務がある。すでにアメリカ合衆国でははっきりとしているそうした大学系列

とともに無縁(ないしはその学統の弟子筋の著述は、これを学問的業績とは到底認知しえないという価値観に立った)学問的領域からの出身者をも迎え、今までの暗黙の前提をほとんどすべてご破産にして、いやおうなくあらたな課題に挑戦することになるのが、今年度からの比較文学比較文化課程での教育・研究であろう。

*

こうした時代の推移に感じるかのように、ひたすら前へ前へとしやにむに進めばよいという冒険者精神も、この国の高等教育における研究者養成課程においては、しかるべき変更を被るべき時期を迎えたようだ。パイオニア的独創的発案よりもむしろひたすら失点のないことをこそ優先するような価値観が登場するのは、ボードレールの指摘を待つまでもなく末世の、そして老衰期のならいである。これまでの比較文学比較文化課程の存在意義そのものを揺さぶりがかねないこの時代の変動にたいして、守勢に回ることなく対処するためにはなにが必要だろうか。それを最後に三

点列挙したい。

(一) 一個の研究者としては、まず日本国内の学界で、最低二つの領域において一人前あ

化・研究者の序列化の波は、あと数年で日本にも到来しようが、そうした責任を負った東京大学の大学院課程で、仮にもその義務を遂行するための物理的条件が危機に瀕しているとすれば、これは由々しき事態といわねばなるまい。比較文学比較文化課程のよき伝統であり、一種それ自体が異文化交流の場であったこのセミナーも、構成員の善意と意志なくしては運営できるものではなかったろう。構成教官の制度的・物理的負荷の増加にともなうて、セミナーの企画・参加が構成員にとつて重圧でしかなくなってしまえば、もはや今までのように自由闊達には運営できなくなる恐れもなしとしない。かといって本家の多忙を見かねて部外者が口だしするというのでは、これはいらぬ容喙だろう。東大比較文学会メンバー主催によるOBセミナーと大学院課程の orientation とは(残念乍ら)今後明確に分離する必要が生じてくるかもわからない。

(二) それから——これは突然話題が terre à terre、枝葉末節となつて恐縮だが——二日目の発表担当となつた講師には教師館を割り当てていただきたい。同室者に迷惑をかけず、(結局徹夜で翌朝の)発表の予習をするのは、学生用の宿泊ユニットでは無理だろう。結局、

つかいされる訓練を積むこと。例えば日本文学の学会で認められると同時にシエイクスピア学会で認められるだけの力量は最低要求されよう。ここには比較文学比較文化という領域は含まれない。というのも比較文学比較文化はそうした専門領域とは別格な水準の営みであるべきだからである。とはいえはなはだ困難なことに、実際のな学会活動としては、日本——のみならず国際——比較文学会や比較思想学会といった組織においてそれなりの業績を積み、その運営における大なり小なりの行政的責務を果してゆくこともまた(以上の最低条件の以前に厳として存在する、そして日常的にはさらに必然的で不可避な)ゆるがせにできぬ社会的責務だろう。要は(それが比較文学比較文化課程であるにせよ)ひとつの専門領域の慣習に染まってそれで自足するような態度はもはや比較文学とも比較文化とも無縁の学問権威主義であるとの認識を練ることだろう。

(一) 二) これに加えて、日本の学界だけではなく外国の学界で通用する学問水準が最低限要求されよう。文学の世界でいえば、それはまず日本国内の国文学会で通用するとともに、その業績がアメリカ合衆国の日本学者

子習など一切せずに二日目の発表に及んだ不届き者としては弁解の余地もないのだが、白状も込めてひとつお願い申し上げます。なおこの件では助手の成さんにいろいろとご迷惑をおかけし、ありがたいご配慮を賜ったことにあらためて感謝します。ついにオレも教師館なんぞに宿泊する身分になったか、それにしてはガクモンは一向に進まぬものよと、むなく「老い」を感じつつ。

(6) 最後に(4)と裏腹に心配なのは、杞憂であろうが、内部については当然のことが外部の人間や新入生、留学生には通じにくい、という事態にたいする配慮がときとして不十分なことである。「若く美しい学問」だった比較文学比較文化も founding father たる島田謹一先生を失い、その東京大学における「四天王」の退官を迎え終わつたところで、まさか大きな制度的転換の時期を迎えていることは否定しがたい。学統といった言葉は筆者の必ずしも好むところではないのだが、今年からの入学生のみならず課程の授業担当教官には、こうした「歴史」はすでに神代の歴史となるわけであろう。「四天王」の誰たるやを知らず、その著述に接したこともない学生のみならず、その業績をそれとして認知するこ

やヨーロッパの東洋学者にとつても意味のある業績であるような能力を要求されるということである。日本の独語独文学会で通用するドイツ文学・語学の知識をもちながら、ドイツにおける東洋学者たちになにしても貢献できることが最低の要件となろう。だがこれではまだ不十分である。例えば日本美術史を研究するものなら、その成果が泰西の東洋学者に通用する(これが既にむずかしい)のみならず、かならずしも日本や東洋には興味を示さない北米の美術史学会や国際美術史学会でも通用するのだからなればなるまい。ないしはアジアや中東地域の専門家であれば、その報告が現地地の専門家から「業績」として認知されるだけでなく、さらに欧米の学者にも通用するものでなくてはなるまい。実際この一見当然必要にみえる媒介役は、既存の単独学問ディシプリンの専門家によつては満たすことができない盲点として残つたまま今日まで尾をひいている。そのみならず、専門化の進行とともにディシプリン相互の関はますます高くなつてきて、異分野間の学術交流は昨今かえつて困難となつてい

(2) となればもはやどこにも安住の地はない。むしろ絶えず摩擦を起こさずにはい

い交通の現場に、生あるかぎり身を晒しつつける覚悟しかない。こうした批判的・境界的態度を身につけるには、留学は必須の課程となろう。もはや欧米から学べきことは何もない、などといった主張の聞かれる昨今ではあるが、大切なのは(中国)であれインドであれ、イスラム圏であれ、はたまたラテン・アメリカであれ)日本の流儀の通用しない世界で日本を説明しようと苦勞し、また逆に西洋や異国文化・言語を日本に伝達する場合にいやおうなく経験せざるをえぬ不可思議な、腹立たしい取捨選択作業に反省行為を行き渡らせる訓練なのだろう。欧米の一員でもなければアジアへの帰属も怪しい identity 不明の文化を背景とした国にある研究課程に在籍して、もはや明確とは言い難い(日本)内外の分岐線のうえに立ち、それを何度となく跨ぎしながら両者を相互に異化してやまぬ終わりなき相乗効果のなかに、比較文学比較文化を学ぶ学徒は、みずからの寄る辺なき実存をいやおうなく晒してゆくこととなるだろう。

(3) そのうえで強調されるべきは、情報の交換と蓄積だろう。異質な領域で活躍する知性、議論の土台からしてかみ合わぬながら原資料への切迫とその発掘とを生業としている

*

す。図書館を生かすも殺すも大学院の学生しだいだということ、そしてそれは大袈裟にいえば、日本のそして世界の遺産にたいしている態度をとるか、ということをも意味している、ということを確認しておきたいと思えます。

異分野の研究者。かれらと決して垣根を設けることなく、ありえぬ対等な立場を模索しつつ傷つきつつ交際してゆく vulnerable な開放性。そして有用な情報を既存の分類体系とは別個に、しかしあくまで体系的・組織的に蓄積してゆく努力。

具体的には教養学科図書館を、ただたんに受け身で利用するだけでなく、自分たちの図書室として摺まえ、必要書籍の購入を要求し、図書室の形成に能動的に関与することでこれをさらに発展させ育ててゆく姿勢だろう。それは一方で、自分のあと百年二百年先の利用者のことまで念頭に置き、また隣接領域の学問世界ですべてに登録すみのもの(たとえば九号館に當々と蓄積されている貴重な欧米中露など各国文学・批評の書籍)との不用意な重複は、これを適宜排除する選球眼をもって、比較文学比較文化に必須の図書——つまり八号館図書室で現在覇権を握っている分類法では分類不可能な書籍——を必ずそろえてゆき、それらの書籍のあいだに目に見えないクロス・リフエランスのネットワークを張り巡らせる意識・姿勢である(急いで付言すれば、文学・語学に関していえば駒場九号館の書庫ほどの充実をみている国立大学の図書館は

今日の日本にはほかに多くないから、おおいに利用し、その優秀だが、本来一番輝いているか狂気に接しているべきなのに、ともすれば腐つていたりするさまざまな領域の助手たちとも精々仲よくして、研究・検索の手ほどきを受けて戴きたい)。

それはまた他方では、狭義の比較文学比較文化を越えて、総合文化研究科のさまざまな専攻領域を横断する関心を養いつつ、図書室に存在する書籍の総体をなんらかのかたちで把握しようとする意志が、教官・学生に共有されなければ困難な事業だろう。なにとぞこの小さいけれど貴重な図書室をこれからも主体的に活用し育てていって下さることを、心から祈ります。一旦地方に参ると、駒場のあの図書室がいま目の前にあれば、となさけない思いをすることも少なくない。それなのに駒場の学生や教職員にこの利点を必ずしも十分には意識しておられない方も見うけられるような昨今の図書室をめぐる状況をふと耳にすると、何やら身を斬られるような、惨めな気分が責めさいなまれます。総定員法施行や「行政改革」という名の人員削減で司書の方たちの労働条件も以前よりはるかに悪化しながら、しかし書物は確実に増えつづけてゆきま